

平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代

はじめに 平城宮跡発掘調査部考古第一調査室では、埋蔵文化財センターと共同で平城宮・京出土木製品の年輪年代データの蓄積を進めている。ここでは、昨年度の調査で良好な年代値の得られた平城宮第二次（東区）朝堂院東朝集殿下層溝SD6030出土木製品について報告する。

遺構 SD6030は、奈良山丘陵の一部が舌状に張り出した支丘の南端西縁に沿って北西から南東に蛇行して流れる幅4～6m、深さ0.9～1.2mの自然流路である。

1968年に行われた第48次調査において東朝集殿の基壇下で確認し、1996年の第265次調査、および第267次調査でその上流部分を検出した（『平城報告X』1981、「第二次朝堂院南門の調査 第265次」『1995年度平城概報』、「第二次朝堂院南面築地の調査 第267次」『年報1997-III』）。

溝の埋土は、無遺物の黒褐色粘質土をはさみ上下に大きく区分され、下層は古墳時代前期、上層は中期の遺物を多量に包含している。

試料 1996年の第267次調査で、朝集殿基壇の北西部分、暗灰粘質土より出土した大型の木製品である。全長86.5cm、幅61.0cm、厚さ6.8cm。両端に突起をもつ無花果形の不整形な円盤である。突起の幅と出は、それぞれ15cm・6cm、20cm・2cm。両面ともに手斧ではつた痕跡が明瞭に残る。類例に乏しく用途は不明であるが、盤などの未製品であろうか。ヒノキの板目材を用いており、樹皮直下の年輪まで完存している。

方法 年輪幅の計測は、木材本体から直接行った。ここで、年代を割り出す際に基準となるヒノキの暦年標準パターンには、おもに平城宮跡から出土した柱根の年輪で作成した882年分（37B.C.～845A.D.）のものを使用した。コンピュータによる年輪パターンの照合は、相関分析法によった。

結果 計測年輪数は、175層であった。この年輪パターンは、暦年標準パターンの238A.D.～412A.D.の位置で照合が成立した（このときのt値は、7.7であった）。

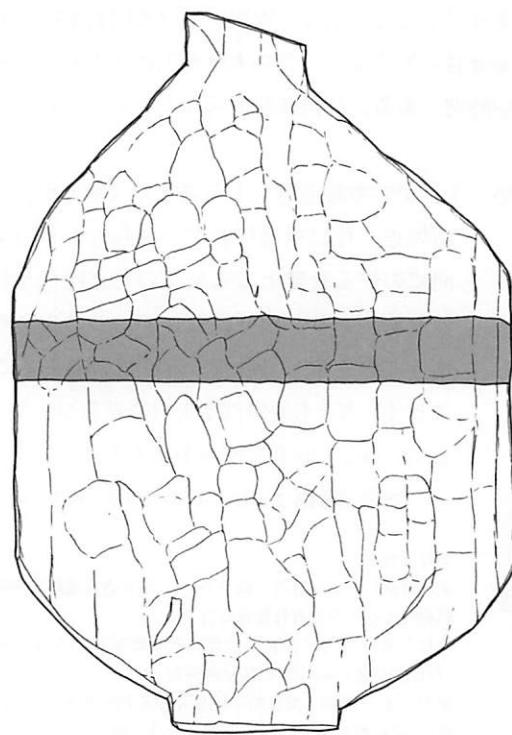
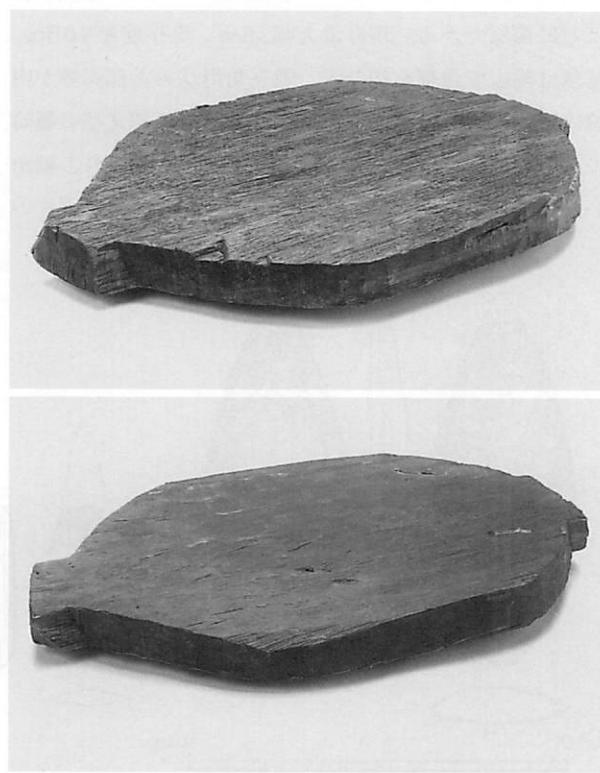


図1 SD6030出土木製品
実測図（1：9）・写真上段手前下辺が最終年輪残存部位



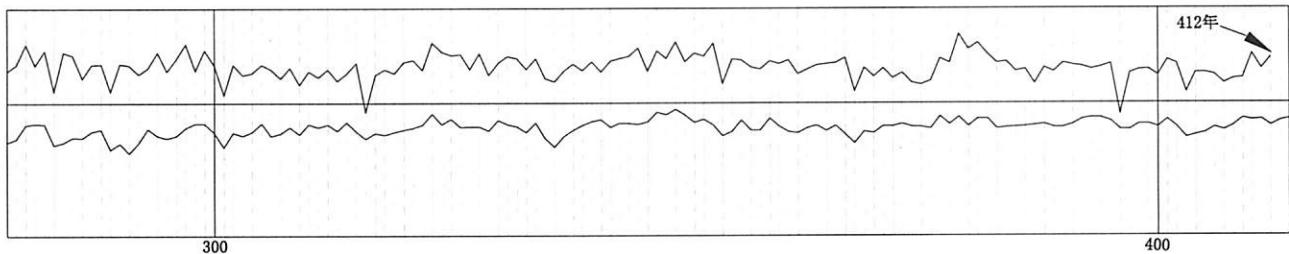


図2 木製品の年輪バーナングラフ（上）と暦年標準バーナングラフ（下）

最終年輪の木材組織を顕微鏡下で観察したところ、夏材が完全に形成されておらず、明らかに年輪界を構成するにいたっていないことがわかった。したがって、この木材の原木は412年に伐採したことが確定した。最終形成年輪が春材部のみからなり、夏材部がいまだ形成されていないものは、原木の伐採時期を夏期以前と特定し、年輪年代法で確定できたその年輪の形成年を試料の原木の伐採年とすることができるからである。

出土土器と年輪年代 以上のように、この木製品は最外年輪の残存する試料であり、正確な伐採年を知ることができた。また、共伴遺物の年代を考える場合、製品ではその使用年数、さらに転用品では転用後の年数を廃棄までの間に加味することが求められるが、未製品であるとすれば伐採から廃棄までの期間は短いと推定され、古墳時代前半期の実年代の検討に有効な手がかりを与えるものと考えられる。

SD6030の埋土は大きく下層と上層に分かれ、そこから出土した土器群は、いずれも奈良盆地における古墳時代土器の基準資料と位置づけられてきた。今回報告した木製品の出土した暗灰粘質土は、大別の上層にあたり多量の土師器、埴輪と共に伴している。土器群の内容は第48次調査の上層土器群と基本的に同様である。

上層土器群は、暗文風のミガキを加える大型の有稜高壺、半球形の壺部をもつ椀形高壺を主要な組成とし、前段階に比べて粗製の小型丸底壺が減少する。甕は基本的に布留形甕の系譜を引くが、器壁が厚くなるとともに調整が粗雑化し、長胴化がはじまる。また、甕が煮沸形態に加わる、などの特徴をもつ。

さらに、ごくわずかではあるが、第48次調査では初源期の須恵器を含み、奈良盆地における須恵器の導入段階

のありかたを示している。第48次調査で出土した須恵器壺は、大阪陶邑TK73型式とされ（関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『権原考古学研究所紀要考古学論叢』第10冊 1984）、あるいは上層土器群自体もTK73型式併行期に位置づけられている（坪之内徹「韓式系土器と7世紀の土師器」『韓式系土器研究』II 1989）。

TK73型式は、わが国における初期段階の須恵器とされているが（田辺昭三『須恵器大成』1981）、こうした須恵器の出現年代については、5世紀の第1四半期、あるいは5世紀初頭ないし4世紀末に求める説と、5世紀の中葉に求める説があり、約半世紀もの差が生じている（白石太一郎「年代決定論（2）」『岩波講座日本考古学』1 1985など）。SD6030上層併行期の土器群の年代も、5世紀後半に位置づける意見がある（関川尚功「近畿地方の5世紀の土師器」『日本土器辞典』1996）。

このように、SD6030上層土器群は、土師器の細別様式の年代の問題とともに、須恵器の出現年代の問題も間接的にではあるが内包しているといえる。今回の調査で得られた412年という結果は、初期須恵器をめぐる2つの年代観のうち、5世紀初頭あるいは、5世紀第1四半期とする見解に相応する。

一般に、長期間存続した溝や旧河川などに遺された木製品の年輪年代と、共伴する土器など他の遺物の年代との整合性は取りにくい傾向にある。この木製品は、土器の年代との整合性の得られた数少ない試料である。そして、従来直接的な材料の乏しかった古墳時代前半期の暦年代推定に新たな検討材料を加えることとなったといえよう。